

平成29年度
希少種ヒルギモドキ生育状況調査報告書

2017.12.22

九州森林管理局

西表森林生態系保全センター

西表島のヒルギモドキの生育状況調査

1 はじめに

ヒルギモドキは、熱帯及び亜熱帯のマングローブに生える常緑の小高木で、高さ10mに達する。日本では、沖縄県（沖縄本島、久米島、石垣島、小浜島、西表島）のみに自生し、沖縄本島が分布域の北限になっている。沖縄県では、樹高4m程度の個体が多く、マングローブ植物の中では陸化した湿地に生育している。埋め立てや開発によって自生地が消失したり、潮流の変化等によって生育環境が悪化し自生地や個体数が急減しており、環境省のレッドデータブックの中で、ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種である絶滅危惧ⅠA類（CR）に分類されている。

西表森林生態系保全センターでは、平成18年度に西表島のヒルギモドキの生育状況について調査を行っているが、今回は、陸路からのアクセスが容易な生育地（平成18年度調査からの継続5箇所、新規1箇所）について調査したのでその結果を報告する。

2 生息地の概況

(1) 与那田川（継続）

① 所在地

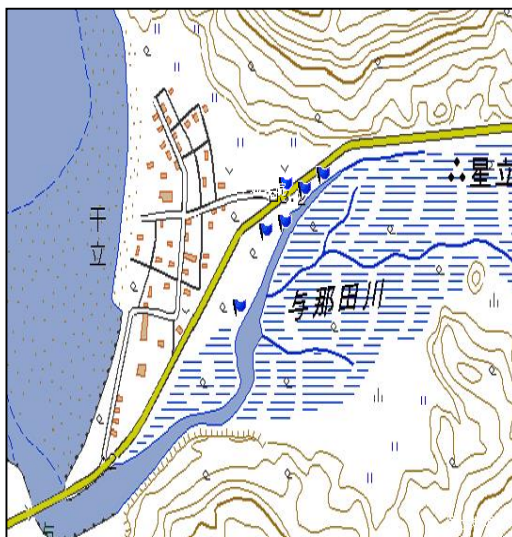
沖縄県八重山郡竹富町字西表国有林138林班ろ小班、民有地。（位置図は右記を参照）

② 平均樹高（3.1m）、平均胸高直径（6.3cm）

③ 周辺状況

県道の両側に生育しているが、特に県道下の与那田川には小規模の群落を形成しながら100本近くが生育している。県道山手川（水田横の民有地）には数十本が生育している。

周囲には、県道山手側ではオオハマボウ、イボタクサギ、ハマイヌビワ等が、与那田川側ではオヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ヒルギダマシ（絶滅危惧Ⅱ類）、シマシラキ等が生育している。



(2) 稲葉（継続）

① 所在地

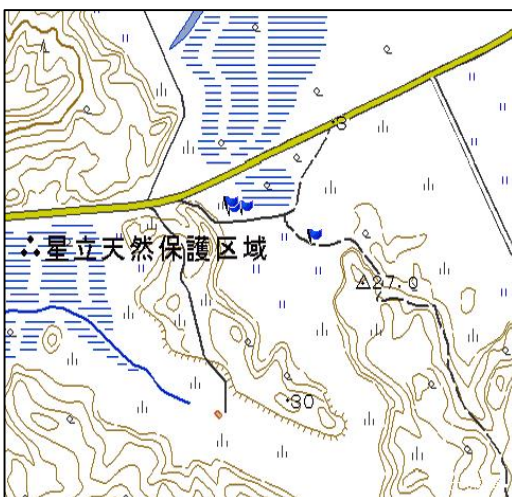
沖縄県八重山郡竹富町字西表国有林136林班ろ小班、同137林班ろ1小班
（位置図は右記を参照）

② 平均樹高（2.6m）、平均胸高直径（4.8cm）

③ 周辺状況

県道から稲葉集落跡地に向かう道沿いの左側に生育し、30本～40本程度の群落を2箇所形成している。

周囲には、オヒルギ、ミミモチシダ（絶滅危惧ⅠB類）、アダン、オオハマボウ、イボタクサギ等が生育している。



(3) 浦内川 (継続)

① 所在地

沖縄県八重山郡竹富町字西表国有林 136 林班
ほ小班、同ほ 1 小班

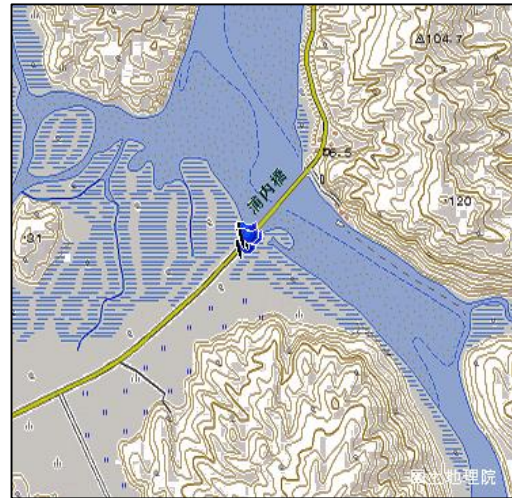
(位置図は右記を参照)

② 平均樹高 (4m)、平均胸高直径 (6.4cm)

③ 周辺状況

浦内橋の下に数十本生育している。浦内川河口側に単体 (樹高 1m未満) での生育が数本見られる。

周囲には、オヒルギ、ヤエマヒルギ、メヒルギ、ヒルギダマシ (絶滅危惧Ⅱ類)、クサトベラ、アダン、モクマオウ等が生育している。



(4) 船浦 (継続)

① 所在地

沖縄県八重山郡竹富町字上原国有林 208 林班
イ小班 (琉球大学熱帯生物圏研究センター貸付地) (位置図は右記を参照)

② 平均樹高 (3.9m)、平均胸高直径 (6.7cm)

③ 周辺状況

船浦湾には、数本単位の団地が点在しており全体で数十本の生育が見られる。

周囲には、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、ヒルギダマシ (絶滅危惧Ⅱ類)、ミズガンピ、シマシラキ、トベラ、テリナボク等が生育している。



(5) 古見 (継続)

① 所在地

沖縄県八重山郡竹富町字古見国有林 198 林班
ろ小班

(位置図は右記を参照)

② 平均樹高 (4.1m)、平均胸高直径 (8cm)

③ 周辺状況

由布島の対岸のオヒルギの後方 (山手側) に長さ 150m程度にかけ数十本 (100本未満) 生育している。

周囲には、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、マヤプシキ (準絶滅危惧) 等が生育している。



(6) 後良川 (新規)

① 所在地

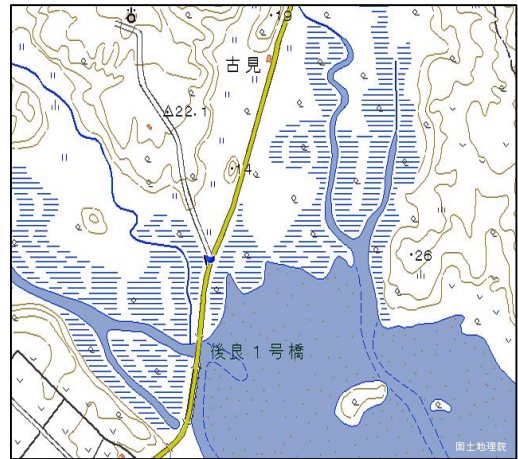
沖縄県八重山郡竹富町字古見国有林 197 林班
い小班。(位置図は右記を参照)

② 樹高 (2.4m)、胸高直径 (3.4cm)

③ 周辺状況

西表野生生物保護センター入口の県道脇 (海側) に 1 本生育している。

周囲には、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、アダン等が生育している。



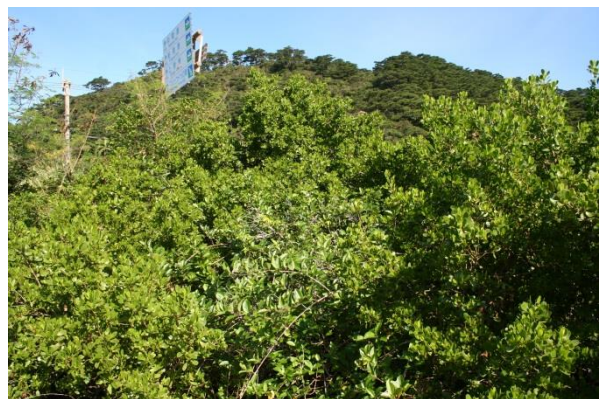
3 まとめ

(1) 与那田川

与那田川の生育地は、星立天然保護区域に指定されていることから、現存のまま人為を加えることなく定期的に生育状況をモニタリングすることが必要である。

生育個体は大小さまざまであるが数個体から数十個体の団地で生育している。

なお、今後の留意点として、生育地は県道沿いであることから、県道の改良工事等が行われる場合は、関係者等と共有を図りながら土砂等の流入に十分注意する必要がある。



(2) 稲葉

稲葉の生育地は、国立公園第2種特別地域、保健保安林、森林生態系保護地域保全利用地区に指定されており、現状のまま人為を加えることなく定期的にモニタリングすることが必要である。

生育個体は、数十個体の団地を2か所に分けて生育しており、現状では安定して生育しているものと思われる。



(3) 浦内川

浦内川の生育地は、星立天然保護区域、全体的には国立公園第2種特別地域、保健保安林、森林生態系保護地域保存地区及び保全利用地区に指定されていることから、現状のまま人為を加えることなく定期的にモニタリングすることが必要である。

なお、今後の留意点として、当該地の生育個体数は他と比較して少ない状況である



こと及び、浦内橋の建て替え工事が予定されていることから、関係者と共有を図りながらヒルギモドキの保全を検討する必要がある。

(4) 船浦

船浦の生育地は、琉球大学熱帯生物圏研究センターへの貸付地であり、試験・研究用として使用されていることから、現状のまま人為を加えることなく定期的にモニタリングすることが必要である。

生育個体は、数個体の団地が5か所程度に点在しているが、現状では安定して生育しているものと思われる



(5) 古見

古見の生育地は、潮害防備保安林に指定されていることから、現状のまま人為を加えることなく定期的にモニタリングすることが必要である。

生育個体は、隣接する民有地に沿って幅1m～3m程度で長さ約150mに渡り数十本～100本程度生育している。しかし、当該地のヒルギモドキは、他の生育地と違って直接海に面していることから、潮流の変化等自然的要因が原因と思われるが、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、マヤプシキの侵入により枯損木が見られる。

今後の留意点として、隣接する農地の土地改良等が行われる場合は、関係者等と共有を図りながら土砂等の流入に十分注意する必要がある。



(6) 後良川

後良川の生息地は、特別な法規制等はないがここでの生息数個体は1個体であることから、現状のまま人為を加えることなく定期的にモニタリングすることが必要である。

なお、当該地は、県道のすぐ脇で過去に県道を改良した土砂が堆積した跡地に生育したものと思われる。今後は、後良川周辺における生息地の調査を行うことを考えている。

